博物館のまわりの

これな～んだ？新聞

No.20
平成 24 年 11 月号

前回、色づき始めた落ち葉をじっくり観察しましたが、今回はもう紅葉まっさかり。くどいようですが、やっぱりこの季節の色を楽しまないわけにはいきません。それから前回、ちょっとおもしろいものが地面から出ているのに気付きました。菌類のカニノツメです。今回もまだ見られるので、そちらもよーく観察してみましょう。

◆とびきり美しい、ツタの紅葉

紅葉はどれも美しいのですが、低地の林でひときわ目を引くのが、ツタです。ブドウのなかまのつる植物で、建物などによく張り付いているウコギ科で常緑のキヅタとはちがうなかまです。ツタの紅葉の美しさは、幹を一直線に登る葉が、下から上へ、赤から黄色、緑とグラデーションを描いて紅葉するところです。紅葉の期間の中でも、限られた季節にしか見られない光景です。

ところで、ツタはつる植物ですが、幹に巻きつかず、まっすぐ上へ伸びています。なぜこんなことができるのでしょうか。答えは、ツタの茎をよく見てみるとわかります。目を凝らしてみましょう。

ツタの紅葉

◆なんの卵？

前回のミニ観察会で、地面に卵のようなものがたくさん埋まっていてそこからなにやらあやしげな姿のきのこが出ているのをみつけました。腹菌類のカニノツメです。たしかに、お正月料理にもよく使われるカニの爪によく似た雰囲気ですが、問題はその中央にある“かにみそ”みたいなもの。参加者のお一人ににおいをかいでもらいましたが、思わず絶句されていました。

そう、このペースト状のものはグレバと呼ばれ、ハエを呼び寄せて胞子を散布させるためのしかけ。まさしくハエが大喜びするようなにおいを発しているのです。近い仲間のスッポンタケやキヌガサタケなども同じようなしかけを持っています。

カニノツメ

カニノツメの幼菌

◆紅葉のつぎは

紅葉の色が平地まで下りてくると、季節は冬。落葉樹はすっかり葉を落として、林の中が明るくなります。こんな季節は、それまでよく見ることができなかった鳥たちの姿が見えやすくなります。林床を歩きながら餌をとるツグミやシロハラなどがどんなふうに食べ物をとっているのか、観察してみるのも楽しいでしょう。

次回のお知らせ
ミニ観察会：12 月 15 日（日）10 時から
新聞 No.21 も観察会にあわせて発行します。

相模原市立博物館